野木小学校同窓会報
第9号
平成7年12月
野木小学校同窓会編集部

就任のご挨拶

同窓会長　田中栄一
（第32回卒　堤）

同窓会の皆様御壮健にてお励みのことと拝察致します。

この度昭和五十九年同窓会発足以来、本会の育成と発展のため大変な御尽力を賜りご業績を残されました、前会長福田善正様がご高齢の事由で職を辞退されました。茲で福田善正様に心からお礼の言葉を申し上げます。

就いては過日の理事会に於いて、私の様な者が会長をと御推挙を頂きひたすらご辞退を申し上げましたがご理解を得ずお受けすることになりました。私は誠に微力でしかも浅学非才到底その器ではございません。幸いにも立派な副会長様始め幹事や理事の皆々様、学校当局の皆様の深いご理確とご協力を得まして何とかその職責を果たしたい所存であります。よろしくお願い申し上げます。

顧みますと、本会会員も明治四十三年野木小学校開校以来卒業回数八十五回となり、二五二九名を数えることになりました。数多くの会員各位が母校校下を始め、全国各地でそれぞれにご活躍されておられますことは力強い限りであります。

わがふるさと野木の地は北に山を背負い、南に豊沃な田園野木平野が広がり、その向こうに北川が流れ、東から西へと一日中太陽の光を浴びて、非常に自然に恵まれた野木の里。この地に生まれ、育った者として、幼き頃を思い出す時、野木平野の中に建つ野木小学校へ、雨の日も風の日も毎日毎日道草をしながら通ったあの道、この道、共に学んだ懐かしい校舎、机をならべて学んだ友達との思い出。先生の顔、先輩後輩の顔……を思い浮かべ、小学校時代のことを振り返りますと懐かしく感慨ひとしおのものがあります。

この度、第九号の会報を発行させていただきますが、これら会報を通じて会員の皆様の近況を知り、お互いの絆を深め合って、それぞれの土地で生活される糧としてご精進して頂きたいと思っています。

どうか今後の同窓会の運営等にご協力を願うと共に、会員の皆様の御多幸とご健康を御祈念しつつご挨拶とさせて頂きます。

退任のご挨拶

前同窓会長　福田善正
（第25回卒　武生）

退任に当たり、十余年の長い間同窓会関係にたずさわらせていただきましたので、過去を振り返り退任のご挨拶にかえさせていただきます。

昭和五十八年、不肖の身をかえりみず同窓会設立委員長をお受けし、当時知事中川平太夫先生を名誉会長にお願いし、初代会長には倉谷静夫先生をお願いし、地区同窓会々員多数の参加を得、同窓会発足祝賀総会が盛大に開催されましたのもつい昨日の様に思い出されます。

その後の同窓会の運営諸準備等とどこおりなくととのえられ順風満帆の歩みを続けられました。これも、もとより中川知事を始め会長並びに役員諸兄同窓会々員各位のご尽力ご協力によるものと思っておりますが、六十二年、会長が病気のため退任されましたので、喜多利夫先生に二代目会長をお願いし、お引き受けいただいたのでした。順風そのものでしたが、その年の六月に考えてもみなかった偉大なる指導者、中川平太夫先生の急なるご逝去にあい、同窓会員はもとより県民等しく悲嘆にくれたものでした。

平成三年、喜多会長壮健にもかかわらずご退任の意思堅く、いたし方なく承認いたしましたが、三年間の任期中には極めて大きな足跡を残され、今日の野木小学校教育環境の改善にご尽力いただきました事に対し、改めてお礼を申し上げたく思います。

喜多会長ご退任の後、私が副会長としての責任上会長を務めさせていただきましたが、これといった事業もせず、只月日の流れのまま過ごさせていただいておりましたが、五年中頃より体調優れず、六年三月退任届を提出させていただき後任の選出をお願いいたしましたが、お聞き届けいただけず、されど、このまま会長に止まることは同窓会の業務に支障を来すと思い、自ら会長の業務を一切放棄し、療養に健康維持にとつとめさせていただきましたが、副会長を始め委員役員各位の御尽力により第三号同窓会誌が発

刊されましたことは誠にうれしく、改めて謝意と敬意を表したいと思います。

お陰をもちまして平成七年になり後任会長も選任され、大変うれしく思っております。何か背中に重荷を背負った感で過ごして参りましたが、今は身も心も軽く療養に専念し、一日も早く体調を整え健康を取り戻すべく努力して参りたいと思っております。どうか田中新会長を中心とした新たな陣容のもと同窓会の更なるご発展の為にご尽力下さることを心からお願い申しあげる次第です。

最後になりましたが、今日まで十年余の間、至らぬまでもここ迄務めさせていただけましたのは、先輩各位の御指導ご援助と共に、会員各位のご厚情ご協力によるものと思い心からお礼を申し上げると共に、野木小同窓会の愈々の発展と会員各位のご健康とご多幸を心から念じ上げ、退任のご挨拶にかえさせていただきます。

ご挨拶

学校長　西川正弘

同窓会会員の皆様には、ますます御壮健にてお励みのこととお慶び申し上げます。

私は、四月一日より歴史と伝統のある野木小学校長としてお世話になっておりますが、すばらしい自然に囲まれ、広い校庭と整備された校舎の中で、一〇六名の児童と一三名の職員が、勉強や運動に専念できますことが、大変有り難く深く感謝を申し上げます。

学校沿革誌によりますと、本校同窓会は、第一回の総会が昭和五十九年十月二十八日に、名誉会長の中川知事、会長の倉谷静夫氏により開催され、その懇親会の席上、中川知事より現在小学校の和室の床の間にあります掛け軸「終始一誠意」が贈呈されたとあります。その後、役員各位の努力と会員の協力によって、現在までに会誌三号、会報八号が発行され、各号を拾い読みさせていただきましたが、どの号もすばらしく、あまりの立派さに感服しております。

創刊号（昭和五十九年十月二十八日）には、同窓会設立準備の経過が、設立準備委員長の福田善正先生によって下記のように報告されております。

『野木小学校の改築、校庭の整備拡張、体育館の改築と学校の整備がなされる度毎に同窓会の必要性がとりざたされて来ました。今回野木地区生活会議が「小学校に同窓会組織のないのは誠に不合理である」との見解にたって、この問題を取り上げられ設立に向けて御尽力をいただいたのであります。各集落より二名の委員が選任され、設立準備委員会が発足すると同時に生活会議の手から設立準備委員会にバトンタッチされ、設立総会を兼ねた最初の同窓会の総会開催に向けて第一歩が踏み出されたのであります。以来、同窓会の規約の草案と承認、規約に基づく役員の選任依頼と承認、同窓会誌第一号の同時発行とそれに伴います諸準備、会費徴収とその方法、総会当日の運営の在り方等々につき会議を重ね協議検討を加えて参ったのであります。』

この様に、役員各位のご努力、会員各位の昔懐かしい温かいお心持ちで、母校を中心として相互親睦が図られている様子がよく伺われます。

今年度も、会員各位のご協力と役員各位の献身的なご努力により、会報第九号が発行されましたことに対し、心から敬意を表しますと共に、これを機に本会の一層のご発展を心から願っております。

最後になりましたが、同窓会会員各位のご健康とご発展をお祈り申し上げご挨拶にかえさせていただきます。

活きてるね　ほっとかみなか

町議会副議長　竹村長太郎
杉山　第30回卒（昭14）

皆様方にはますますご健勝でご活躍されておられることとお慶び申し上げます。

今回、また接する機会を得ましたので、議会の報告を兼ね、只今の上中町の取り組み等について触れてみたいと思います。

平成六年度末の上中町決算額が八十一億円余りとなって、町民一人当たり百万円という額になりました。町では、中核工業団地、河内川ダムの二大プロジェクトを始めとして、集落排水、公共下水道等の重要事業に取り組み、決算額の約半数が特別会計となっています。

先般の九月議会定例会では、一般会計九九〇〇万円余りの補正をしましたが、それには、県原子力準立地市町村の活性化基金への出資金、七八六万円を含んでいます。

また、熊川宿の重要伝統的建物の選定を受けるため、「伝統的建造物群保存地区」保存条例案等を採択しました。

今、二十一世紀を目前に控える中で、昭和二十九年一月、上中町が誕生してから四十年の歳月が流れ、それぞれの時代に即した町づくりが実施されてきたのであります。

しかし、現在最大の転換期にあって、町民の町づくりの意識も変化しつつあり、社会の変化や町民意識に対応する

琵琶湖・若狭湾リゾートライン計画

と共に、ますますの高齢化社会に向けて、豊かな町づくりを進めるため、平成十七年（二〇〇五年）を目標とした第三次総合開発計画が策定されました。これは、町民の意見を基にして上中町固有の資源や魅力を見つめ、「新しい時代に即した町づくりはいかにあるべきか」を問い直したものであり、みんなが共感し、共に助け合い、活き活きとした上中町を目指したものであります。

①快適で潤いがあり、②魅力と活力があふれ、③なごやかで安心のできる、④快活に心が響き合う、ほっとなまちづくりで、四つの基本理念を掲げ、景観づくりや鯖街道熊川宿の整備、文化活動の推進と施設の整備、琵琶湖若狭湾リゾートライン新鉄道の建設、観光の振興、地域産業の育成、福祉の充実等八種目の重要プロジェクトを設定していて、心豊かで活き活きとした共生田園の町を目指し〝活きてるね、ほっとかみなか〟をキャッチフレーズに。また、上中のKを連想させ、躍動的、流れ、広がりを感じさせる造形のシンボルマークを制定しています。

田園の町を誇る上中町にも「新食糧法」が波及し、一五・五%の転作を余儀なくされ、今、農家は転作麦の種蒔きや蒔き付けや、或いは園芸作物の計画等、見込み薄の作業に多忙な日々であるのは事実なのであります。

最近のゴミ処理問題や重要事業等の進捗状況等に触れたいところですが、字数が許されず、次の機会に譲ります。では、ご機嫌よう。

農業集落排水事業完成（平成七年三月）

竣工式

下水処理場

旧職員からの便り

思い出

平井ふじ子

私は、昭和三十一年から昭和三十六年の五年間、堤分校でお世話になりました。

杉山区の一、二、三年生の二十数名が分校で学びました。複々式の授業を私ひとりで受け持っておりました。

小浜市、遠敷郡のへき地複式研究大会が分校であり、こどもたちより多い先生方に算数の授業をみていただきました。

新米教師で恥ずかしいことも忘れていました。

今のようにコピーやワープロもなく、いつも原紙をきって問題のプリントを作りました。

大晦日になると分校へ門松を立てに行きました。

学年末には学習発表会があるので、本校の子ども達に負けないように、子ども達も私も、毎日遅くまで一生懸命練習をしました。

今のように自家用車もなく小浜貨物のトラックで小道具を本校まで運んでいただきました。

自転車で通っている私を毎朝、堤のお宮さんまでお迎えにきてくれた子ども達の顔が姿が昨日のように思い出されます。

また、一、二、三年生全員がとても仲良しだったことが心に深く残っております。

職員の研修旅行がありましたが、先輩の先生と私が妊娠中だったので、本校の留守番をすることになりました。

女の用務員さんと私達女教師二人とで宿直をしたのです。当時、木造校舎で風が吹くとがたがたしていました。

今の若い先生方には想像もつかないことだと思います。

今から三十八年前のことです。

今では、ひとつひとつが私の大切な思い出になりました。

皆々様のますますのご健康とご活躍、野木小学校のご発展をお祈り申し上げます。

（上中町井ノ口に在住）

あのよき時代を今…

筧　昭夫

土煙のたつがたがた道を、バスにゆられて学校前のバス停を降り、校門をくぐって愛らしく屈託のない子ども達に迎えられたのが、昭和三十八年の四月一日でした。

この時以来、私の教員生活の約三分の一に当たる十二年間を野木小で勤めさせてもらったのです。校下の皆様、同窓の皆様には大変お世話になりながらご無沙汰ばかりで誠に申し訳なく思っています。

十二年間の思い出は限りなく多く、何から書こうかと迷ってしまいます。私が赴任した頃は野木地区の土地改良の真っ最中で、明くる年の三十九年に完了し、曲がりくねった道や榛の影を見ることができなくなったのです。

四十三年から校舎の改築が始まり、翌四十四年に今の校舎が竣工しました。

懐かしい木造校舎。今も強く脳裏に焼き付いています。校庭に面した各部屋の窓には防球用の金網が張られ、立派な松が昔を偲ぶかのように枝をのばしていました。職員玄関に向かって左に校長室、職員室。右に宿直室、小使室。上り勾配になった講堂への渡り廊下。和室は新校舎の二階にありました。

改築時に拡張されましたが狭い校庭で連合体育大会や野球、ソフトボールの練習をし、毎年素晴らしい成績を残していました。自慢話になって恐縮なのですが、ソフトボールを担当させてもらい、本田吉夫先生の協力もいただきながら、十一回もの町内優勝を成し遂げました。土曜日曜になく、くたくたになりながら夕方遅くまで頑張ったことが懐かしく思い出されます。

また、町内のトップを切って鼓笛隊が編成され、地区挙げての体育大会に、目の覚めるような鮮やかな赤のユニホーム姿でパレードを披露し喝采を浴びました。

野木の子らは決して体格的には恵まれていませんでしたが、素晴らしい知性と持ち前の頑張りで輝かしい歴史と伝統を築いてきました。

それに忘れることのできないのは、四十二年に待望の校歌ができたことです。山本和夫作詞、川口晃作曲。「箱ケ岳に青空に　太陽もえ……」今は亡き当時の中尾正作校長先生から「筧君、校歌を額にしたいので一筆振るってくれんか。」と頼まれ、未熟なりにも一生懸命書かせてもらったことを覚えています。

一泊二日の臨海学校、各寺もちまわりの「よい子の集い」想い起こせばきりがありません。

十二年の間には、私ごとで恐縮ですが、家の新築、子どもの誕生、父の死等々悲喜交々私の人生の縮図を見る思いがします。

野木小時代は、私にとって本当によき時代でした。思い出すがままに書かせて頂きましたが、思い出はつきません。こうしてその当時を思い起こす機会を与えて下さったこと、心より感謝いたしております。

遠い日、只々がむしゃらに突き進んでいた頃の私を温かく楽しく過ごさせて下さった当時の地区の方々や、児童のみなさん達に、限りない懐かしさとお礼を申し上げ、野木小学校の益々の御発展と、同窓生諸氏の御多幸を心からお祈りしつつ筆を置きます。

（上中町下タ中に在住）

新入会員紹介

よろしくお願いします

平成六年度卒（十七名）

（六年を送る会の自己紹介の中から）

将来の夢	奥田康博
建設会社で働き、家や建物を建てることにがんばりたい	中村吉伸
日本電気ガラスで一生懸命働いてお金を貯め、外国へ行きたい	福住剛己
プロ野球の選手になってジャイアンツでプレーしたい	前田賢志
ペットショップを建てて、ムツゴロウのように動物王国を作りたい	中川　太
みんなと上中中学校へ行けるので、がんばりたい	田中奈央子
看護婦さんになって、入院している人に優しく声をかけたい	西　若菜
保母さんになって、保育所のみんなと楽しく遊びたい	森井美由
小学校の先生になる。その後、習字の先生になって個展を開いて楽しみたい	森　奈津美
東京に住むこと。仕事はテレビ局で働きたい	宮川裕美
保母さんになって、毎日、小さい子ども達と楽しく遊びたい	武田靖代
北海道の動物王国へ行って、動物の世話をしてあげたい	塚本紘子
スチュワーデスになり、お客さんに喜ばれるようになりたい	倉谷千鶴
インテリアコーディネータになり、きれいな部屋をたくさん作りたい	速水由美子
絵を習い、フランスに留学して立派な絵の先生になりたい	喜多真利子
保母さんになって、楽しくてみんなに好かれるようになりたい	倉谷朋美
美容師になって、美容室を建て、たくさんの人に来てもらいたい	倉谷尚美
保母さんになって、小さい子ども達と毎日楽しく遊びたい	

会員からの便り

ふるさとの思い出

第23回卒（昭和7　旧姓中村）
堤　中井和枝

私は、ふるさとと申しましても十七歳までしか里におりませんでした。小学校五年生くらいになったら、田が忙しくて、今日は六人、明日は五人と人手を頼み、田植えや稲刈りに学校を休まされ、今日は大事な裁縫があるから嫌だと言っても祖母のいったことには反対できず、田が少なかったらこんなことはないのにと思いました。が、その時は口答えできず、また、裁縫は暇になったら通わせてあげると言って勉強もろくろくできませんでした。で、私はどうしても京都に行きたいと言って京都の洋品店に女中奉公にいきました。その時は、妹も大きくなり、仕事も手伝えるとしになりましたので、十七歳で京都へ参りました。それから、私は法事又は祝い事以外にはふるさとへ帰っておりません。

道路が変わったのも田んぼの仕事が変わったのも、その時、祖父様の家へ行くことがありましたが、道が分かれており、どちらへ行くのかと、息子が自動車の運転をしていたのですが、私にはわからないので、山を頼りに左へ左へと行ってくれと言うと、そんなところに道はないと言うほどわかりませんでした。

学校が新築され、すばらしい学校になったことでしょう。一昨年のこと、毎年クラス会をしており、このときは学校でと言うことで楽しみにしていましたが、主人が亡くなり、出席できませんでした。

私の思い出と言えば、バレーボールの試合の他は何もありません。その試合の日は、昼の食事は半分食べてよく動けるようにと、三部の試合、郡の試合、その上の嶺南の決勝と進み、優勝できました。メダルや花輪を戴いてかえりました。私の思い出はこのバレーボールしかありません。

クラス会で五十年ぶりにあった先生が顔を合わすなり、バレーボールの和枝さんかと思いだして下さいました。今日と違って、写真がとってありませんので、クラス会で話していたら綾野様が家にあるから今度持ってきてあげると楽しみにしていたのに、先に他界されてそれっきりです。どなたか持っておられないでしょうか。その時、帰るのが一人でしたが、嬉しくて森の中を通るとき、キツネが走り通っただけでしたが、優勝した嬉しさで、寂しさも暗さも気にならず、家に着いたときにはとっぷり日が暮れていました。

今でも、バレーボールはテレビで見ています。今の若い人もバレーボールは校内での試合や学校同士の試合に日曜たんびに出かけています。若いときのいい思い出になることでしょう。バレーボールは私の一生の思い出です。この年になっても楽しい思い出はバレーボールだけです。

（京都市左京区に在住）

■平成七年度卒（九名）

秋風に　ゆらゆらゆれる　すすきかな　河原裕司
夕ぐれに　赤とんぼたち　ゆれている　東山健志
ポカポカと　太陽光る　小春日和よ　福田　徹
秋の風　落ち葉がおちる　かえり道　栗原裕明
秋風に　すずめ達まう　天高く　奥本恭兵
夕ぐれに　どんぐりをとり　数くらべ　植野浩平
朝つゆに　ほのかにぬれる　ひがんばな　山田真由美
冬の星　見上げてみれば　オリオン座　塚本恭子
息白し　冬の寒さが　身にしみる　窪田みゆき

遠い少年の日のこと

第27回卒（昭和11）
中野木　速水卓雄

もう、半世紀以上昔のこと、少年の頃は四季を通して、友達と山野を駆けめぐる遊びの毎日であった。それは自然と仲良くつきあって少年期をすごしたことが〝楽しかった想い出〟として体の中にしっかり残っているのが何よりの心

の財産でもある。夏休みの北川での水遊び、河川改修用のトロッコ遊び、秋は栗拾い、冬は雪を相手にスキー遊び…と、それこそ一年中遊びを通して自然を体いっぱい受けて友達と友情を深めながら育っていったことはたしかである。

八月二十三日の地蔵盆祭りも楽しい子供の行事への参加であった。地蔵さんに赤い前掛けを着けて七屋橋のたもとで鉦を打ちながら〝まいっておくれ！〟…と道行く人にお願いして夕方までむしろの上で地蔵さんといっしょにすごした一日は満ち足りたものであった。当時、農村の学校は農繁期休業があって、農家の忙しい六月と十月に学校へ行かずに家事を手伝った。仕事のほか風呂炊き、子もりなど…今思うと手通いを通して経験豊かな親からいろいろなことを学んでいったし、親の指導は具体的でわかりやすく、その通りすれば確実に巧くいったことを覚えている。そんな中で、親に対する敬愛の心を持つようになったし、働くことの喜びをも感得するよい機会であった。その頃は宿題もなかったし、勉強の量も少なかったし、親孝行を身につけて、国のためにつくすことが人間成長への目標であった。

さて、九月にオーストラリアの子ども達が母校を訪問、親善交換会の中で体育館で全校児童と仲良く手をつないで楽しく遊んでいる光景をみて、どの子ども達も世界の国々と仲良くすることの大切さを自らの心と態度で学んでいるように感じとれてならなかった。

私どもの少年の頃と比較にならない環境の変わりようである。

学校週休制の導入は、学校はもちろん、家庭地域までその役割が問われようとしている現在、子ども達の学校以外での体験学習の場が広がるなかで子ども達のために環境を整え、条件整備への努力が必要ではなかろうか。母校の発展をお祈りします。

（上中町中野木に在住）

無題

第32回卒（昭和16）
上野木　西本義光

拝啓　貴殿には御身大切に、御清栄の事とお喜び申し上げます。

戦後五十年が過ぎ去りました。再出発となった一九四五年八月十五日、各地は真夏の太陽がじりじりと照りつけ、焼けつくような一日だったと思います。

さて、伊東市汐吹崎付近で続く群発地震は、十月五日になっても依然として活発で、地震は五百七十六回、生き地獄さながらです。自家の方も三年ほど帰っておりません。当方も稲刈りの真っ最中だと思います。

それから、中野木の速水誠五さんの林道を通れば、私の松茸山のかくし場がありました。昔を考えると思い出ばかり、話がつきません。

それから、玉置の奥本すが先生には一方ならず御指導を賜りました。宮川村加茂の竹中多門先生にも、高学年だったと思いますが、一方ならず御指導を賜りました。

思い出ばかり話がつきません。また、次の機会に、伊豆にて。

（静岡県修善寺町に在住）

自宅にて

ふるさとの便り

第41回卒（昭和25）
堤　森井　俊

琵琶湖唐橋のかかる瀬田川の向側に石山寺を眺め、一歩踏み入れば、まだまだ稲作も盛んな大津市のはずれ黒津に住居を構え、忙しい日々の合間、愛犬「ふく」と一緒に農道を散歩しながら、四十五年も前の事を想い浮かべております。

杉山の山中で、薬草取りをしていた八月十五日の終戦日を小学校二年生の時迎えたと思います。終戦を挟み二十五年に卒業するまでの野木小学校時代、まず頭に浮かぶのは、ものがなくても、よく遊び元気だったなあという感慨です。時代が変われば、四季それぞれの趣、風光も変わるのか？

あの深い雪道を堤から武生まで、時には田圃の氷雪上を遊びながら通った日々。帰れば父親に作ってもらった竹スキー、竹ぞりで夕方遅くまで遊びまくったこと等。

春夏ともなると、河原での水遊び、自前の引っ掛け針での鮎取り、時には河原を挟んでの三宅村との石投げ合戦、危ないことを平気でよくやったものだと反省することもありました。農繁期になりますと、日暮れまで働いている両親の作業場へ出向き、稲掛けの手伝い、梯子に登っている父親の手元まで巧く放り投げられた嬉しさ。ネダッテ褒美に漸く買ってもらった中古の自転車。物がなくても元気で楽しい思い出ばかりが浮かんでくるのは、今の子ども達と比べ、ある意味では幸せだっ

たかも知れません。隔世の感を抱かざるを得ません。

校内暴力、いじめ等我が野木小学校にはないものと信じますが、何でも手に入る物質文明が、ここまで発達しますと、かつての三無い主義（無気力・無関心・無感動）に代わって、最近は〝規範感覚がない〟〝人間関係がない〟〝達成意欲がない〟といった「新三無い族」が台頭しているそうです。小さい時から親の監視下に置かれ、何でもやる前から親が口を出し、手を差し伸べる過干渉が子供の意欲を失わせ、学業偏重の価値観が子供を塾へ駆り立て、群れ遊びの場を奪ってしまう。

文化も生活も昔のような都会、田舎といった感覚が縮まり、変わらなくなっているかも知れませんが、しかし、爽やかな田舎は、世の風化に犯されることなく、何時でも懐かしく暖かい想い出の田舎であってほしいものです。爽やかで風光明媚な環境の中で、心身ともに健全な子供達を永遠に育む野木小学校を懐かしく思い出す今日この頃です。

（大津市黒津に在住）

無題

第46回卒（昭和　旧姓福田）
武生　藪本恵美子

私が野木小学校を卒業して、かれこれ四十年になろうとしています。ここ十五年ほどは、よく学校を眺めて懐かしく子供の頃を思い出しています。

私が通っていた頃の学校は、今のように鉄筋ではなく木造の建物でした。学校の前に川が流れていて、橋を渡って石の校門をくぐり、毎日登校したと思います。先生方の玄関を入って左の方に職員室があり、右の方には小使いのおばさんの部屋があったように記憶をしているのですが…。

私達の小学生活は本当にのびのびと楽しいものでした。毎日暗くなるまで遊び、家へ帰れば家族みんなで食卓を囲み、心の豊かな生活だったと思います。遊びにしても、高学年から低学年までみんな一緒に、みんな仲間として遊びました。

冬は縄跳びにピンポン、夏は北川へ水遊び等楽しい想い出ばかりです。冬になる前にストーブのたきつけ用に、杉の葉を拾いにいったこともありました。

自然豊かな野山に囲まれたこの土地に生まれ育ったことに感謝し、毎日元気に、明るく暮らしております。野木小学校卒業の皆様もお元気にお過ごし下さい。

（小浜市に在住）

ふるさとへの想い

第49回卒（昭和33）
玉置　塚本泰道

今年は戦後五十年という節目の年である。高度成長した日本経済は、いまバブルのあとの不況にあえいでいる。

私はちょうど終戦の年、昭和二十年（西暦一九四五）に生まれ、今年で五十歳の節目である。私の人生はまさに戦後と共にあるのです。この年に生まれた同級生は大変少なく、わずか十八名（三十六の瞳）だったと思う。

私が野木小学校を卒業して早三十七年。幼いころ、あの頃のふるさと野木は私にとって全世界だったような気がする。玉置や武生の道は隅から隅まで知っていた。よその家の庭先までも通り道だったりした。学校の帰りにはズボンを濡らしながら魚を捕ったり、田んぼで相撲をとったりした。……村をとりまく山や川、それらを彩る草や木。秋は黄金の稲穂がなみうち、春は菜の花や蓮華の花でうずまりつくされ、黄と赤や緑の織りなす中を自由にのびのびと遊びまわったものである。

今から思えば決して豊かな暮らしではなかったが、この時期は多感な少年時代であり、それに加えて名もなき百姓の息子としての社会的地位の問題、（？・貧乏）をも含めて感じることが多かったかも知れない。しかし、そこには悲愴感のかけらもなく、貧しさ故のあわれさを一度も感じたことはなかった。精神的にゆとりのある生活を送ることができたのである。

また、なんといっても私の人間形成の上で最も重要な影響を与えたのは野木小学校における六年間である。恵まれた学校環境（人間味豊かな多くの先生方や友達、今でもその顔がはっきりと目に浮かびます）であったためか、学校の生活は非常に充実した日々を送ったようである。

今、これらの遊びや学びの中で楽しかったこと、悲しかったことの思い出が次から次へと走馬燈の如く現れては消え、消えては現れ、果てしなくその中に十代の少年の姿がいつまでもいつまでもまわり続けるのである。

（東京都田端に在住）

筆者は後列右から２人目

野木小学校の思い出

第75回卒（昭和59）
堤　井上智恵

私は、この春大学を卒業し、東京で社会人としての生活を始めました。もう半年もたつのに、東京にも社会人としての生活にもまだまだ慣れることができず四苦八苦しています。そして、内臓がつぶれそうな通勤ラッシュや、東京弁が飛び交う中にいたりすると、ふっと上中のことが懐かしくなり今度はいつ帰れるかなと考えたりします。

今回、この原稿依頼をいただき、自分の小学校時代をふりかえると、いろんなできごとが次々と思い起こされ、小学校の間に経験できたことの多さに驚きました。

私の小学校時代は、自然の中で、季節の移り変わりを直に感じることのできた六年間だったと思います。春は、学校の帰りにかえるの卵やつくしを取って。夏は、午前は水泳、午後はソフトボールの練習というハードなスケジュールをこなして。秋は、運動会や連合体育大会の練習で、いつも筋肉痛になっていたり。冬は、冷たい雪が降る中を大きな大きな雪だるまを作りながら学校に通ったり。真冬でもスカートと裸足で校舎の中を飛び回っていました。授業中や登下校の途中にいろんな発見をしたり、新しい遊びを考えたりと、楽しく有意義な六年間でした。

私が小学校を卒業してから十年以上たちますが、野木小学校の様子はあの頃のままでしょうか。私が野木小学校で体験できたことを、今の子たちも体験できているでしょうか。東京で、毎日塾に通わなければならない子たちを見ていると、自分が本当に楽しい小学校時代を送れたことを感謝しないわけにはいきません。

今の私にとって、小学校時代に経験できたことは本当に貴重な財産になっていると思います。

これからも、野木小学校が、卒業していく人達に貴重な思い出をたくさん与えられるような小学校であり続けてくれたらいいなと思います。

（東京都世田谷区に在住）

成人式をひかえて

第79回卒（昭和63）
中野木　東久美子

成人式を間近に控え、今とても不思議な気持ちです。常に他人事であった成人式を遂に自分が迎えることになるとは……。

自分が成人するにあたって〝成人する〟とはどういうことなのかを改めて考えてしまいます。成人とは人に成る、つまり、一人前の人間となるということです。私の中で〝一人前〟を定義するとすれば「自分のことは自分でできる、また、自分に関することの責任を自分自身で取ることができる。」ということになります。今まで親という盾で守られてきたわけですから、自分に責任を持つということの大変さがあまりよく理解できていません。

また、今までの何かにつけて守られてきた未成年という立場を棄て、まがりなりにも成人として生きていく為にはおめでたい成人式といえども浮かれてばかりいられません。むしろ悲壮な覚悟と決意をもって臨むべきなのではないかとさえ思うのです。

高校卒業後、京都の短大に通う為、期待と不安を胸に一人暮らしを始めた私でしたが、苦労したことや困ったことも数多くありました。しかし、一人暮らしという初めての経験は一人前の人間となるための大切なステップであったと思います。これにより、確実に自分が一歩成長できたことを感じ、一人暮らしをさせてもらえたことに大変感謝しています。

現在は卒業研究の論文に追われる日々です。それが終われば再び就職活動の日々が始まります。本格的に活動を始めたのは四月中旬でしたし、多少甘い考えで気楽に取り組んでいたことも否めません。しかし、ここ数年不況で就職難だといわれていました。それは予想以上に厳しく、私の周りでも内定をもらっていない人の方が多い状態です。それでも中には複数の企業から内定をもらっている人もいるわけですから、不況と言い訳をしたくはありません。最後まで諦めずに頑張りたいと思います。

最後に、二十年間私を育ててくれた両親と家族のみんなに心からありがとうと言いたいです。まだまだ未熟な私ですが、日々是精進の心構えを持って、常に昨日より少し成長した自分でありたいと思います。そしていつの日か、胸を張って一人前の人間に成ったと言えるようになりたいです。

児童読書感想文（県・支部入選）

「やぶかのはなし」を読んで

一年　田中駿也

せんせい、あのね。

ぎおんさんのつぎの日、ぼく、めがものすごくはれたんだよ。「うわあ、しろめがぶよぶよやわ。こりゃーあかん。」って、おかあさんがびっくりして、すぐびょういんへいったんだよ。

ぎおんさんのあるまえのばん、たいこをたたいていると き、やぶかがみみのところにきたかとおもったら、めにはいったのがいけなかったんです。すぐに、タオルでひやして、なんべんもめぐすりをさしたけど、こんなすごいことになるって、はじめてしったよ。

それで、やぶかについてもっとしりたくて「やぶかのはなし」をよんだんだよ。

ぼくが、いちばんびっくりしたことは、ちをすうのはめすのかだけってことです。そして、すったちは、おなかのなかのたまごをそだてるためにひつようなんだって。ちには、ものすごいえいようがはいっているんだね。ぼくは、きのうもかにさされたんだよ。にわでせみのぬけがらをさがしていたら、そこらじゅうがかゆくなってきて、とてもこまりました。いえのなかにはいってよくみたら、うでのまんなかと、手のこうと、ゆびがあかくはれていました。すぐにすうっとするくすりをぬってもらいました。

ぼくのちをすったかは、どこでたまごをうむのかな。きっと、いけのふちのくさのかげのみずたまりのところかもしれないね。なぜかというと、ほんにかいてあるみたいに、あさすぎないし、ふかすぎないし、せますぎないし、きたなすぎないし、ひなたすぎないし、ちょうどいいところだからだよ。やぶかって、だいじなたまごをうむところをさがすのに、たいへんなんだね。

また、やぶかのおすって、あまいくだもののしるが大すきなんだって。ぼくといっしょだよ。かは、とがった口をかたいすいかのかわにつきさして、あまいしるをすうなんてすごいなあ。よっぽどじょうぶな口さきをもっているんだね。小さいからだなのに、ふしぎです。そして、あまいしるをおなかがぱんぱんになるまですうんだよ。

ぼくがいちばんびっくりしたのは、ちをすったかがぴんくのうんちをすることだよ。ちはあかいから、そのいろがうんちにもでるんだね。いちど、ぴんくのうんちをみてみたいなあ。

もうひとつびっくりしたことは、たったようかでおとなになることだよ。ぼくは、二十ねんもかかるんだって。

ぼくは、このほんをよんで、やぶかのいろいろなことがわかって、すごくべんきょうになったよ。こんな小さいかも、ちをすったり、たまごをうんだりして、いっしょうけんめいにいきているんだね。ほんとうにすごいなあ。

でも、やぶかさん、これからはぼくのちをすったり、めにはいったりしないでくださいね。いたいめにあうのは、こりごりだから。

「おばあちゃんがいるといいのにな」を読んで

二年　清水太久真

ぼくの大すきだった、大きいおばあちゃんがこ年の六月三日になくなってしまいました。

それで、この「おばあちゃんがいるといいのにな」の本のだいを見たとき、おばあちゃんをおもい出してしまいました。ぼくは、しんけんに読みました。

このお話に出てくるおばあちゃんは、ホタルが大すきです。ぼくもすきです。ぴかぴかして、とてもきれいだからです。ぼくのうちのまわりは田んぼで、夏のはじめごろは、たくさんとんでいます。ざしきのところのガラスからのぞくとよく見えます。

また、おばあちゃんは、まつたけとりの名人です。ぼくは、まつたけとりをしたことがないけれど、とてもおもしろそうです。ぼくも一どとってみたいな。

あらしの時は、みんな、おばあちゃんのところにあつまります。それは、きっと、おばあちゃんのそばにいるとゆう気や元気がもらえるからでしょう。それにおばあちゃんもあん心できるからでしょう。ぼくも、あらしの時は、こわいからみんなといえにいます。

おばあちゃんがびょう気になりました。この子は、びょういんに行ってあげてえらいなあ。とても心ぱいだったんだろうなあ。

ぼくの大きいおばあちゃんもびょう気になってから、びょういんに入いんしたり、たいいんしたりしました。入いんするまでは、いっしょにさんぽをしたり、かけっこをよくしました。それに、「たくちゃん、たくちゃん。」と言って、とてもかわいがってくれました。

ぜんぜんおこらなかったし、ぼくは、大きいおばあちゃん

が大すきでした。びょう気でねている時、もっと話をしてあげたり、やさしくしてあげたらよかったと思いました。

大きいおばあちゃんがしんだとき、おかあさんから聞いて、ぼくはびっくりしました。おそうしきの時は、とてもかなしくなってしまいました。おばあちゃんの水をかえたり、せんこうを立ててあげたりしました。

ぼくのいえは「九人かぞくです。」が、ぼくのじまんでした。それは、みんなが、

「ええ、多いなあ。」

と言って、びっくりするからです。でも、今は八人かぞくになってしまいました。

この子も、おばあちゃんがびょう気の時、どんな気もちだったかなあ。かなしかっただろうなあ。あそんでもらえなくてもいいから生きていてほしかっただろうなあ。

ぼくの大きいおばあちゃんは、今、天国で何をしているのかな。きっと、ひとりぼっちでさびしいと思います。

さよならも言わずに天国に行きました。もっと、もっと長生きしてほしかったなあ。

大きいおばあちゃん、ぼくたちを大じにしてくれてありがとう。天国でしあわせになってください。そして、天国で、ぼくたちを見ていてください。

長いあいだ、ありがとう。

「火の雨がふる」を読んで

四年　森　真奈美

今年は、せんそうが終わって五十年。

この夏休みは、この事について私なりに少し考えてみたいと思いました。私にはせんそうのけいけんがありません。でも、この本を読んで、せんそうがどんなにかなしい出来事だったかが、少し分かったような気がします。

うちのおじいちゃん、おばあちゃんは、せんそうを体けんしているので、この本のように、とてもこわいおもいをしていたのだと思うとかわいそうだと思いました。それで、おばあちゃんは、

「もったいない。」

とか、

「今は幸せや。」

とか、よく言うんだろうな。

よりちゃんは、目の前でお母さんと弟が死んでいくすがたを見て、それでも、まだたたかいは続いていくのを、毎日どんな思いですごしていたことだろう。なぜ、せんそうなんかしたんだろう。

せんそうは何のためにするんだろう。

神風がせんそうから守ってくれるなんて、大人の子どもだましなんじゃないのかな。私はこんなことを強く感じ、かなしかったです。

火が雨のようにふるなんて、考えもできない。それほどせんそうは、こわいものなんだろうな。

友次は、初めて〝火の雨〟を見ました。それは、とってもこわいことが私にも分かりました。前によりちゃんが話してくれたとおりだった。

お寺や、子ども達が遊んでいた路地や、友次の家に、しょういだんが落ちたのを見て友次ははっと気がつきました。「人形が。」と思った友次は、む中で外にとび出しました。友次は、ほのおの中、必死でお父さんの人形を守って、ついに人形を守れなかった友次は、すごくかなしかっただろうな。友次も、せんそうのこわさ、かなしさを強く感じただろうな。

子どもがなきさけぶのを見ていたよりちゃんは、決心をして頭から水をかぶり、ビルに向かって子どもを助けに行きました。自分の命があぶないかもしれないのに、よく人を助けられるな。私だったらそんなこととてもできない。

けいぼうだんの人が小さな女の子を助けてきた時は、よりちゃんもいっしょだとおもっていたのに。よりちゃんは死んでしまったのかな。私はドキドキしながら読んでいきました。

友次が病院に行った時、見まいに来た人が、「よりちゃんらしい女の子が、小さい男の子を連れて、川の方に向かった。」

と言いました。私も友次みたいに「よりちゃんだ。」と思いました。友次と同じ気持ちになりました。

「よりちゃんが生きていてよかった。」

と、心からそう思いました。読み終わった後も大きな感動の気持ちが残りました。

会誌購入依頼

前年度発行の同窓会誌第3号が相当数残っております。地元会員の全世帯と希望者の方にお届けしましたが、全会員へのお知らせが不徹底で発行の事実をお知りにならない方もおられるものと思われます。次回発行は平成11年度になりますので、ご入り用の方、是非ご購入下さい。

送料込み千円で受け付けますので、ご検討下さい。

家庭の日啓発作文（町コンクール金賞）

みんなではかまいり

二年　辻本有未

今年もあつい夏がやってきました。わたしのかぞく八人は、おかげさまでみんな元気です。

「おーい、行くぞ。」

お父さんが、わたしたちきょうだい三人をよびました。車にのって、ついたところはおはかでした。

まずさいしょに、水をくんでタワシでゴシゴシとおはかをみがきました。そのあと、おかしをおそなえして、きれいなお花をたてたら、

「ああ、いいきもち。」

と聞こえてくるような気がしました。

「おはかの中には、ゆみのしらないひとがたくさんたくさん入っているんだよ。ゆみたちが今こうしているのは、この人たちのおかげだ。さあ、もう一ふんばり力を入れてみがこうか。」

とお父さんが言いました。

いもうとも、一歳のおとうとも、あせびっしょりになっておはかのそうじをしました。

やっとできました。おはかがわらっているように見えました。わたしもわらいました。気もちがすうっとしました。

わたしたちがいて、父母がいて、おじいちゃん、おばあちゃんがいて、ずうっとずうっとつづいているって、ふしぎな気がしました。

夜、ごはんの時、お父さんが

「きょうは、はかそうじごくろうさん。お前たちがびょうきやけがをしないように、ごせんぞさまがいつも見まもってくださっているんやで。だから、ゆみたちは、かんしゃの気もちをわすれずに、いっしょうけんめいがんばらなくっちゃダメだよ。」

と話してくれました。

「そうだね。こうして、みんなそろっておぼんをむかえられるって、ありがたいことやね。」

とお母さんが言いました。

わたしの気もちの中で、やる気がぐうんとわいてきました。その日の夜は、とてもよくねむれました。

つぎの朝、家の中にちょうちょが入ってきました。

「ころしたらあかんよ。おぼんになると、しんだおじいちゃんたちが、ちょうちょやトンボになってくるらしいよ。」

大そうじ

三年　清水美緒

今日、家ぞくみんなで、大そうじをしました。

わたしと、弟、妹は、まどふきをしました。まず、スプレーをシューと、まどにかけると、あわがジュッと出て来ました。妹は、あわがなくなると、「もっとほしいよう。」とさわぎました。わたしは、もう、うるさいなあと思いました。でも、あまりにうるさかったので、とうとう妹にまけて、

「はい、はい、今、あわをつけてあげるよ。」

と言って、つけてあげました。

弟は、やり始めてすぐ、お母さんに、

「大ちゃん、テーブルクロスあらって。」

と言われて、テーブルクロスあらいをしました。まどふきをしていると、ジャージャーと、水の音が聞こえてきました。わたしは、そのとき、あっ、大輝もがんばっているなと思いました。

とちゅうから弟がやってきたので、いっしょにまどふきをしました。

三人いっしょにこすったので、キュッ、キュッと音が聞こえました。わたしがあわをつけてあげるとき、

「大輝の『だ』、里奈の『り』だよ。」

とあわで字を書きました。妹、弟はしんけんに見ていたのでびっくりしました。三人でがんばったので、とてもきれいになりました。里奈はまだ二歳なのに、わたしたちといっしょにまどふきができてかんしんしました。

お父さんは、自分のへやをそうじしていました。大きなまどを、ギュッ、ギュッと音が出るほど一生けんめいふいていました。お父さんは、屋ねにのぼってふいてすごかったです。お父さんは一番よくそうじをしていました。わたしたちは、お父さんを見ていてよけいがんばりました。

お母さんは、おふろとトイレそうじをしていました。

おばあちゃんは草むしりをしていました。おばあちゃんが草をむしったところには草がなくて、花が元気にさいています。

その日は、あつくてとてもつかれました。

けれども、家の中や家のま

わりがきれいになったので、とても気もちがよかったです。それにみんなでしたので、とても楽しかったです。これからも、そうじの手伝いをしていきたいと思います。

わすれてはいけない事

五年　竹村嘉信

ぼくの家のくらは、今から約百三十年ぐらい前、おじいさんのおじいさんになる人が建てたそうです。その当時としてはとてもりっぱなくらで、こしがわらという外かべのもようは、今でも数少ないめずらしいものだそうです。

でも、そのくらも、百年以上雨や風や雪や太陽の光にさらされてきたために、かわらやかべのいたみがひどく、この九月にとうとうとりこわす事になりました。そして、その場所に車庫を建てて、二階の一部屋がぼくの勉強部屋として使える事になりました。今まで自分だけの部屋がなかったぼくは、とてもうれしくてはしゃいでいました。

そんなぼくに、ある日お母さんがこう言いました。

「嘉信、たとえこのくらがなくなっても、ここにくらがあって、そのくらを建てた人がいて、ずっと守ってきた人がいた事をぜったいわすれたらいかんよ。」

ぼくは、お母さんがなぜこんな事を急に言い出したのか、その時はまだ分かりませんでした。そして、喜んでいるぼくとは反対に、くらがなくなるとさみしいと言いました。古くなって使えなくなった物は捨てられて、次々新しい物に変わってしまうのはしかたないけれど、いろいろな思い出までなくなりそうで、やりきれなくなるんだそうです。

八月最後の日曜日、家族みんなでくらの中のかたづけをしました。くらの中には、ぼくの見たことも名前さえも知らない物がいっぱいあって、まるで宝物の様でした。

おじいさんはそれらの思い出を一つ一つ確かめるように、ていねいにかたづけていました。そして、昔の人がどんなに苦労してこのくらを建てたか、どんなに節約して家の道具をそろえてきたのか、ひいおばあさんやおばあさんがおよめさんに来た時のことなど、いろんな話をしてくれました。ぼくはなんだかとてもあったかい気持ちになってきました。いろんな思い出があるという事は、とても幸せな事なんだと思いました。

今年は、戦争が終わって五十年の節目の年になるそうです。ぼくのおじいさんも戦争に行きました。おじいさんはぼくに、戦争のことをいろいろ教えてくれます。でも、戦争を知っている人もだんだんと少なくなり、福井県の人口の七十パーセント近くが戦後生まれになってきているそうです。そのうちに、戦争のことを知らない人ばかりになって、戦争のために命を失ったり、家族や家を失った人達の悲しみや苦しみ、人が人をころし合うことのみにくさやむごさが、いつの間にか人々の心の中から消えてしまうとしたら本当に悲しい事だと思います。

人はいろんな事をわすれたり、捨てたりしながら生きて行くけれど、ぜったいにわすれてはいけない大切なことがあると思います。形としてはたとえ残せなくても、言葉として語りついで、いつまでも守っていかなければいけないと思います。

ぼくの家のくらはなくなってしまうけれど、ぼくの心の中にずっと生きていくと思います。そして、ぼくのおじいさんがぼくにいろいろな事を話してくれた様に、ぼくもいろんな事を、いつかぼくの子どもや孫に話してあげたいと思います。

第3号会誌会員名簿正誤表

前年度に発行しました第3号会誌の会員名簿に以下の誤りがありました。

頁	回	会員名	誤	正
47	17	伊豆千代子(滝)	死亡者	生存 宝塚市野土 4-7-13
63	31	清水碩雄		死亡者欄記入漏れ
67	34	森口和男	前ページに記載済(二重記載)	
76	41	田中　実	死亡者	生存 京都市伏見区桃山南大島町1-4 桃山南団地34-404
78	43	東　文代(小畑)	死亡者	生存 奈良県生駒郡斑鳩町興留5-15-2
88	51	竹村嘉久治		死亡者欄記入漏れ

たいへん申し訳ありませんでした。
特に伊豆千代子さん・田中実さん・東文代さんの3人の方には絶対にあってはならない過ちをしてしまいました。深く反省しております。今後、決してこのような過ちを繰り返しませんからお許し下さい。申し訳ありませんが、会誌をお持ちの会員さん、お手数ながら訂正の方よろしくお願いします。

編集後記

会員各位のご協力により、ここに第9号をお届けできますこと、編集員一同厚くお礼申し上げます。今後とも、情報提供、投稿等をよろしくご協力下さい。

事務局から

。住所変更や改姓された方は速やかにお知らせ下さい。

連絡先　〒919-15
☎ 0280-57-1300
福井県遠敷郡上中町武生
野木小学校